クローゼット

おーじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クローゼット

【Ｎコード】
Ｎ３０６３Ｙ

【作者名】
おーじ

【あらすじ】
鍵のかかるクローゼットを中心に、マンションの一室で繰り広げられる性と恋愛。
数年前にＳＮＳ（モバゲと大集合ネオ）に投稿した作品に手直しをしました。

序～鈴木さん

気だるい空気の中に爽やかな桜の風が吹くころ、俺は大学の近くのとあるマンションに引っ越してきた。新たな学校生活と独り暮らしの始まりに、期待をしながらも家事等に一抹の不安を感じる。
俺は、未だ荷物が解かれずに、ダンボールが積み上がっている部屋を見渡した。学生という身分にしてはなかなかの部屋だし、居心地も良さそうだ。都内にしては家賃もべらぼうに高いわけではなく、掘り出し物と言えなくもない。
そして、特に気に入っているのがこのクローゼット。
サイズが大きい立派なクローゼットだが、何故か外側に鍵が付いている。

まだ引っ越して間もないので中身はほんの少しの衣類だけだが、これからの収納面において強い味方であること間違いなしだ。

引っ越しして来てから1ヶ月程たったある日。
いつものように俺は学校からマンションに帰った。最近は新居にも慣れ、家が落ち着くという感覚も芽生えてきた気がする。一日の授業が無事終了した安堵とともに台所で湯を沸かし、インスタントコーヒーを入れ、音楽をかけた。
ああ、これで今日はもうのんびりできるな、と思っていると、
ドゥリィーン
ドゥラァーン
と呼び鈴が鳴った。お客さんのようだ。

「ち、誰だよ」

居留守を使おうかと考えたが、結構な音量で音楽をかけていたので外に音が漏れている可能性もある。仕方なく俺はカップを置き立ち上がった。
「はい！　どちら様でしょう？　」
「あの……鈴木です」
女の、緊張した声だ。
鈴木、はて、誰だったかな？
しかし、ドアの除き穴を見ると知った顔がそこにあった。たしか、学校でいくつか同じ授業を受けている女の子だ。
何度か会話をした事もある気がする。何用かは分からないが、ドアを開けないわけにはいかないだろう。
俺はゆっくりとドアを開けた。
「あ、鈴木さん。どうしたの？」
「あの、お家の場所は畑中くんに聞いたんだけど、少し話したいことがあって…」

畑中というのは、これまた学校の同級生だ。彼は何故か俺の事を気に入っているみたいで、勝手に友達にされてしまった。俺は、俺みたいな人間を気に入る人間など理解できないけれど。
しかしそういえばこの子、畑中がずいぶんと熱を上げていた女の子ではないか。完全に聞き流していたから忘れていたが、「鈴木さん鈴木さん」と、やたらと俺の前で興奮する畑中を思い出す。その思いの丈はどうか俺にではなく、本人にぶつけてもらいたいものだ。
「とりあえず中に入りなよ。立って話すのも慌ただしいし。お茶くらい入れるよ」
そう言って鈴木さんを部屋の中に入れた。俺は意外と紳士なのだ。
そして、鈴木さんに出すために紅茶を入れる。お湯はさっき沸かしたばかりなので、ヤカンはすぐに熱くなった。
「史朗くん。ごめんなさい。急に家にきちゃって。迷惑だよね……」
「全然。暇だったし大丈夫だよ」

正直もうのんびりしていたかったのだが、社交辞令でそう答えた。
しかし、彼女のような人気者が俺に一体全体なんの用なのだろう。
「あのね。話っていうのは……」
鈴木さんはそう言うと頬を朱に染めモジモジしだした。
あれ、なんというかこれだとまるで愛の告白の前みたいな感じじゃないか。いやいや、そういうのは大抵妄想っていうか、恥ずかしい勘違い――
「私ね。史朗くんのことが好きなの」

――じゃなかった。これ以上ない程直球である。
ううむ、そんな風に言われてじっくり見てみるとこの子なかなか可愛らしい顔立ちをしているじゃないか。艶やかな黒髪と清楚な格好がおしとやかな雰囲気を醸し出してもいる。
しかし分からんなあ。こんな清楚で可憐を絵に書いたような娘子が、何故俺のような腐ったミカンのような人間を好きになるのだろうか。世の中は何か間違っとる。
ただね、俺には既に恋人がいるんだ。だからこのようなまたとない僥倖でも、それをそのまま受け入れるってわけには……
「キャッ！！」
俺が黙って俯き、頭でごちゃごちゃ考えていると、鈴木さんの叫び声がした。
顔を上げると、どうやら紅茶をこぼしてしまったようである。しかも白いブラウスに。
「あーあ。大丈夫？　」
と聞いた時だった。
鈴木さんはおもむろにブラウスを脱ぎだし、上半身は下着姿になってしまった。ブラジャー1枚で覆われた乳房が美しく上を向いている。
「ハ、ハンガー貸してもらえる？　」
「う、うん。火傷しなくて良かったね」

俺はさすがに戸惑った。
しかし、彼女の方も、隠してはいるものの更に戸惑っている様子だ。その証拠に顔が真っ赤赤である。
もしかしたらこれは彼女の慣れないなりに一生懸命のアプローチなのかもしれなかった。確かに、服に熱い飲み物をこぼした時にはすぐに服を脱がねば火傷する危険がある。しかし、このタイミングだ。振られそうなのを察知して、状況を打開しようとしての行動だとしてもなんの不思議もない。もしそうであればなんと健気なことであろうか。
俺もぎこちなくなってしまった足を立たせ、ハンガーを取りに行こうとしたのだが、その時だ。不覚にもベッドから垂れ下がった鈴木さんの足につまづいてしまったのである。
そして、倒れた先はうまい具合に鈴木さんの上。下にはベッド。
彼女の柔らかく温かい身体、特におっぱいがちょうど俺の固い鎖骨周辺に押し付けられ、心拍数は上昇、特に下半身すなわち海面体の激流は渦高い満ち潮の波のごとく俺の超自我を覆い尽くしておっぱいがおっぱいでおっぱい。
いやいや、これはいかんと体を起こそうとするが、彼女の柔く細い指が俺の袖を掴んだ。
「好き」
再びそう言う鈴木さんの唇は微かに震えていて、瞳は何かを訴えるかのごとく気持ちばかり潤んでいた。
そして、俺の脳裏にはこの状況を解決する究極の言葉が浮かぶ。
まあいいか、と。
俺は即座に目の前のみずみずしい薄ピンク色の唇にキスを初めた。それは次第に加熱し、俺の手が彼女の胸に辿り着く頃には舌が絡み合っていた。
だが、お互いの頭が徐々に溶け始めた時だ。
ドゥリィーン
ドゥラァーン

と、呼び鈴が鳴った。お客さんのようだ。
当然、無視しようと考えていた。
しかし、
「史朗！　開けてよ！　音楽が聞こえるからいることはわかるのよ！」
と怒鳴り声が聞こえたのでそうはいかない。これは綾子の声だ。
綾子とは俺の恋人の名前である。彼女はこんな時、俺が出るまで帰ろうとはしない。
「鈴木さん！ちょっとこっちきて！」
「え？」
俺は戸惑う鈴木さんをクローゼットの中に押し込んだ。そして、カチャリと鍵を閉める。
流石にちょっぴり心が痛んだが……
紅茶の付いたブラウスと玄関の靴を隠した後、俺は寝惚けた顔を作りドアを開けた。
「ふぁーあ。眠い。あ、綾子。どーしたの？　」
今まで寝てました、という演技を精一杯したつもりだ。
「どうもこうもないし。夜家行くって今朝メールしたじゃん」
すっかり忘れていた。
「お前忘れてただろ。全く、本当に私のこと愛してるか疑問だよ。とりあえずあがらせろよ」
この女は美しいのだが、口が悪い。
しかし、そんなことを言っている場合ではない。綾子がクローゼットの中にいる鈴木さんの事を知ったら、間違いなく「お前らを殺して私も死ぬ」と言うであろう。
だからと言って下手に外に出ようと促せば、確実に疑われる。

ここはとりあえず部屋に入れて、しばらくしたら外に出るように促そう。

綾子

綾子が部屋に上がる。
鈴木さんがクローゼットの中で暴れないかが心配だったが、今のところおとなしくしているようだ。
「まじさあ、あり得ないんだけど聞いてよー」
「どうしたんだ？　」
「なんかー。１週間前くらい前に店に来た客なんだけど、ホストくずれの勘違い男がいてさあ。メールは朝昼晩で５０件以上送ってくるし、毎日店の前で待ち伏せしてるし、マジ本当ありえねーんだけど」
綾子は水商売に従事している。水商売とは言ってもいわゆるキャバクラだが、綾子の人気はなかなかのものらしく、ちょっとした企業の中間管理職ぐらいの月収は叩き出していた。確かに彼女は美しい顔立ちとスレンダーな体型の上に垢抜けているから、人気なのは分からないでもないが、小娘にそんな大金持たせても良いことはないのではないかとも思う。
さて、綾子が家を訪ねて来る際は、まずひたすら愚痴から入る。あの客がどうでこの客がどうでと。しかし、俺はそんな綾子の愚痴が嫌いではなかったりする。真剣に愚痴を言って、時に拗ねたりする綾子の姿はなかなか可愛らしいからだ。そういった部分でも俺は綾子の事が大好きなのである。
だが、今はそれどころではない。
クローゼット内の鈴木さんには後で最低限の言い訳をしなくてはならない。しかも、間違っても綾子にはクローゼットの中身を疑われてはいけない。
これはいわゆる無理ゲーという奴なんじゃあなかろうかとも思うのだけれど、無い頭を精一杯捻る俺。
「ねー。なんか今日はうわの空じゃね？ケンカ売ってんの？」

いかん、思考に気を取られ、会話を疎かにしては本末転倒だ。
「いや、今日は学校が少しハードで疲れたんだよ」
「まじかぁ」
綾子はニヤッとした。
しまった……綾子は俺が疲れてたり落ち込んでいたりすると、急にしたがるのだ。元気付けようと思うのか。普段なら大歓迎だが、今だけはダメだ。いくらなんでも、後から鈴木さんに殺されてしまう。途中でクローゼットの中で暴れるかもしれないし。
「腹が減ったからメシでも行こうか」
苦肉の策でそう言った時には遅かった。綾子は僅か2、3秒の間でスッポンポンになってしまっていたのだ。まるでクレヨンしんちゃんのようだ。
綾子は俺を強引にベッドに投げ倒す。
「気合いを入れてやるぅ」
そう言って綾子は俺にキスをしだした。すると、彼女の尖った唇が容赦なく俺の唇の毛細血管を刺激するので、なんだか色々と面倒になってしまって、まあいいか、と思ってしまう。
俺の最大の敵は、俺自身の意志の弱さかもしれないな。 俺は綾子を抱きしめると、彼女のキスの勢いよりほんの少しづつ強くキスを返していった。すると、綾子も負けじと舌を入れてくるが、俺も更なる勢いをもって舌を絡ませる。唾液と唾液が潤滑油になるから、舌は滑るのだが、俺達はどうにか舌を押しつけようとする。けれど、やはり滑る。
こうなるとどちらが先に唇を離すか、意地の張り合いになるのが俺達の常だが、大抵は綾子が先に参るのだ。
「史朗……」
綾子は普段は気丈な女であるが、こういった場面では徐々に女の子らしくなる。敏感でしょうがない年頃だから、いつもの鋭く睨むような表情は溶け、頬は真っ赤で、小刻みに震えていた。
俺は彼女のそういうギャップが大好きだった。

綾子がもっと女の子らしくなっていく箇所を、俺は夢中に刺激していった。
「早く、お願い」
彼女がそう言って、行為も佳境に入ろうという頃、
ドゥリィーン
ドゥラァーン
と呼び鈴が鳴った。お客さんのようだ。
俺はもちろん無視しようとした。
しかし、
「畑中だけど！史朗いる？鈴木さん来なかった？」
という大声が聞こえたのでそうはいかなくなる。
俺は畑中への罪悪感からベッドから飛び起きた。
「どうしたの？史朗。」
と綾子は言うが、俺はとっさに彼女を持ち上げクローゼットの中に放りこんだ。

畑中〜終わり

勿論、クローゼットには鈴木さんも収納されている。だから、二人を同時に詰め込んだ状態になるわけだが、仕方あるまい。

なんと言っても、畑中からすれば俺が今やっていたことは万死に値することだろう。彼の好きな女の子――鈴木さんに対して俺はあまりに蔑ろにする行動をとっているからだ。俺が畑中だったら殴る蹴るの暴行では済まさないだろう。これは畑中、怒っていいよ。

しかし、その矛先が俺に対して向くのであれば、なんとかして事実は隠蔽し、揉み消し、ごまかしていかねばならない。ここはまず、畑中に対して適切な対応を施して帰すのが先決だ。

俺はクローゼットに鍵をかけ、玄関へ向かった。

「お、おう畑中。どうした？」

「あ、史朗。鈴木さん来なかった？」

畑中は身の丈百八十五センチの巨漢で、おまけに高校時代ラグビーをやっていた、いわゆる体育会系男子である。

「来てねぇよ。なんでだよ？」

来たけどもう帰ったと言おうかと迷ったが、そう答えた。

「そうか……ちょとな。詳しいことは中で話そうぜ」

「ちょ、ちょっと待てよ。勝手に入るな。外で話そうぜ」

慌ててそう言う俺。

「なんでだ。外では話しにくい事なんだよ。それとも本当は鈴木さんが中にいるのか？」

「な、なんで俺の家に鈴木さんがいるんだよ。わかった。入れよ」

全くひやひやする。

さて、畑中が部屋に入ってきた。

とりあえずクローゼットの中は静かなようだ。中は暗くて広いから、幸いお互いの存在に気付かないでいてくれているのか。それとも今は静かにしておいて後から責めたてる算段か？　そうなれば身

体的に致命傷を受ける可能性は高いが……
まあとりあえずは畑中だ。
「紅茶でいいよな？」
「おう」
せめてもの償いで鈴木さんが使ったカップで畑中の紅茶をいれた。
俺はこの状況の中で彼になるべく早く帰ってもらうよう促すべきである。そのためには、まず畑中の話を聞かねば始まらぬであろう。
「それで、どうしたんだ？　」
「俺な。今日鈴木さんに告白したんだ。前にも言ったけど、俺こんなに人を好きになったの初めてだった…」
いつもならハナクソを飛ばしてやる程の内容だが、今は彼の一言が胸に突き刺さるようだ。
「それで？　」
「お、いつになく真剣に聞いてくれるな」
「当たり前だろ！　友達の一大事に真剣にならない人間なんていないさ」
罪悪感は人を優しくする。
畑中は“友達”という言葉に少し感動しているようだった。
「ありがとう。だけど鈴木さんは『他に好きな人がいる』って。フラレちまったんだ」
「まじかぁ」
「ああ、それで鈴木さんの好きな人って誰だと思う？なんとお前なんだよ」
「ふーん、ってええええ！　まじかよ」
勿論知っていることだが、驚くふりをしたのである。上手くできただろうか。
「それで俺、つい彼女にハッパかけちゃったんだ。告白しなくちゃ何も始まらねーぞって。お前の家まで教えちまった」
「馬鹿だなあ。なんでそんなことしたんだよ」
今日に限って言えば甚だ迷惑なこと極まりなかったではないか。

「いや、俺はもういいんだ。だけど鈴木さんが泣くようなことにはなって欲しくない。だからさ、史朗、お前には恋人がいるのは重々承知してはいるけれども、どうかその子とは別れて鈴木さんと付き合ってやってくれないか」

なんと可哀想な奴だろう。そして論理が滅茶苦茶な阿呆である。ここまで来ると笑えないぜ、畑中。　しかし、畑中はその後３０分以上、いかに自分が鈴木さんの事を好きかを語りだし、そしてさらに１時間以上これからどうすれば良いかをウジウジと悩みだした。

何が『俺はもういい』だ。未練たらたらじゃねえか。

いかに可哀想と思っていても、これには参った。早く帰れよ。というかなんだかうざったくなってきた。

「あーもう面倒くせーな！　」

気付くとそう叫び、畑中の首根っこを掴みクローゼットの中に放り込んでいた。

そして、鍵をかけて、

「しばらくそこで頭冷やしてろ！　」

と怒鳴ったのである。

しまった！　あまりにうざったかったので、今までの流れ通りクローゼットに収納してしまったではないか。

ほぼ無意識のうちの行動だった。

確かに、クローゼットに放り込めば一時的に難を逃れることができる。しかし、畑中まで放りこんでしまって、その後どうしようというのだ。

俺はいたたまれなくなり、家を飛び出した。

今度は俺が“これからどうすればよいか”をウジウジと悩む番だった。街のコンビニやらファミレスやらで３時間程悩み、煙草は一箱空になる。その結果、いつかは開けなくてはならないという当然至極なことに気付き家に戻った。

まずは、呼吸を整える俺。土下座の体勢をとりつつクローゼットの鍵を開けた。

カチャリ。
「ごめんなさい！　」　……
「あれ？」
勢い良く土下座をした俺の前には、予想を裏切り誰もいない。
確かにクローゼットの中には3人がいるはずなのに。自力で抜け出して帰ったか？
不可解なことであったが、俺は既に疲れ果てていた。厄介なことがなくなったのだし、例のごとく、まあいいか、と思って眠りについてしまった。　次の日、学校に行くのはとても気が重かった。畑中や鈴木さんと顔を合わせたくはなかったから。しかし、彼らは二人とも学校に来ていない様子だった。また、学校が終わってから綾子に電話をするが、出ない。その日は、三人共に会うこともなく、拍子抜けなことに波風は立たなかった。
だが、その次の日も、そのまた次の日も、いつまでたっても鈴木さん、綾子、畑中の3人とは連絡がつかなかったし、家にも帰っていない様子だった。
時がたつに連れ周りも騒ぎ出す。
綾子の店の店長や、両親が消息を尋ねてきたりもした。学校では鈴木さんと畑中が駆け落ちしたという噂も聞いた。
だが、俺はそれらに深くは関わらなかった。何故って、恐ろしかったのである。
数ヶ月がたつと、騒いでいた周りも、関心を無くしたようで、三人の話題も聞かなくなっていったのだった。

四年後――――――
俺は大学生活を過ごしたこのマンションを卒業と同時に去ることとなった。

しかし、この四年間、あの癖だけはどうにも治らなかった。クローゼットに人を放り込む癖のことだ。あれからというもの、人間関係に面倒なことが起こるとついやってしまい、もう三十人以上が収納されたことになる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3063y/

クローゼット

2011年11月9日01時07分発行